

インタビュー映像は、計4本で構成されています。

今回は1本目です。

インタビューアーは、日本財団ボランティアサポートセンタースタッフの山田。

お答えいただくのは、聴覚障害者の皆川さん（紺のシャツを着ており、髪を後ろに結んでいる20代の女性）です。皆川さんは、日本にいるとき看護師として働き、現在、アメリカのギャローデット大学に留学中。

インタビューのテーマは、コロナ禍における周囲や社会の変化についてです。

画面情報

山田と手話通訳者が映る。

山田が日本語で話し、手話通訳者が日本手話へ通訳をしている。

皆さん、こんにちは。日本財団ボランティアサポートセンターの山田と申します。新型コロナウイルスの影響で、社会が変化し続けています。日ごろからボランティアをされている皆さんも、今自分にできることがないかといろいろ考えているのではないのでしょうか。今日はろう者の皆川さんにお話を伺います。本日のお話を通して、皆さんが感じたことが、今後の行動のきっかけとなったら嬉しいです。

それでは皆川さん、どうぞよろしく願いいたします。

画面情報

左画面：山田・手話通訳者が映る。

右画面：皆川さんが映る（紺のシャツを着ており、髪を後ろに結んでいる女性）

山田が笑顔で手を振り、皆川さんが笑顔でそれに応じる形で手を振っている
皆川さんが手話で話す。皆川さんの手話は手話通訳が音声日本語へ通訳している。

はい、よろしく願いします。

山田

それでははじめに、自己紹介をお願いします。

皆川

皆川です。今アメリカにいます。今日は日本とアメリカをオンラインで繋いでいます。

新型コロナウイルスの影響で、当たり前の日常が変化している中、オンラインでのインタビューをありがとうございます。

日本にいた時は看護師として働いていました。その中で、ろう者が直面している医療面での問題や困難を知り、今はアメリカのギャローデット大学に留学しています。

この留学には日本財団の聴覚障害者海外奨学金事業の奨学金を頂いています。

今日はどうぞよろしくお願ひします。

山田

それでは早速、質問に入っていきたいと思います。このコロナ禍において、いろいろ社会の環境が変わってきているかと思いますが、皆川さんご自身の中での変化でしたり、周囲の環境、社会で変わったことなどありましたでしょうか？

皆川

本当にたくさんあります。

ろう者でアメリカにいる立場で、日本の皆さんとは経験していることが違うかもしれません。新型コロナウイルスの感染拡大により、外出自粛やオンライン授業への移行など、生活の変化は確かにたくさんあります。

例えば、ろう者にとっては実際に会って、目を合わせて、手話で話をするのが自然で当たり前のことです。私は学生の立場で、ギャローデット大学に通って、学生や先生と手話で話をし、そして授業を受けてきましたが、外出自粛で全てできなくなってしまいました。

対面の授業ができなくなり、オンライン授業に移行しました。

オンラインでも手話で話ができますが、欠点は、受講する学生が 15 人、20 人と多くなると、それぞれの画面が小さくなってしまって、手話が見にくく、とても目が疲れてしまうんです。

以前の対面の授業では 3 時間なんて当たり前で、例え 3 時間でも、ろう者同士手話で会話することは全く問題ないんですが、オンラインで小さい画面を見ながらとなるとせいぜい 1 時間が限界です。

今まで当たり前にしてきたやり方が、今では同じようにすることができなくなっていると感じています。

新型コロナウイルス感染拡大で、政府から外出自粛の要請があったり、緊急事態宣言が出されたりして、ろう者もみんな外出を自粛し自宅で過ごしていました。

今は緊急事態宣言が解除され、仕事や学校も再開していますが、それでも感染を恐れて外出を自粛し続けているろう者がたくさんいます。

特にろう者の場合、必ずしも自分が住んでいる地域に他のろう者が住んでいるわけではありません。

聴者ならすぐに近所の人とおしゃべりすることができると思いますが、ろう者が顔を合わせて手話で話したいと思えば、電車や車で移動して会いに行く必要がある人が多いと思います。

5月に全国のろう者に対してアンケート調査をしました。

インターネットを使って、すべての項目を手話と日本語の両方で質問する方法で調査し、およそ500人から回答がありました。外出自粛で、孤独や不安の感じ方が以前と比べて大きくなったかどうかという質問にたいしては、80%のろう者が孤独や不安を、とても/かなり感じていると答えました。外出自粛で人との交流ができない、それも近所の人との気楽な交流さえもできないこの状況は、今後の課題ですね。

若い人であればスマホなどを使いオンラインで繋がることのできるのもまだ良いと思います。

でも高齢者の場合、聞こえる聞こえないに関わらず、スマホなどの操作もしたことがなく、ましてやオンラインなんてどうしたら良いかわからない人もいますよね。

今孤立している人も、以前は普通に会って手話での会話を楽しむ生活ができていました。

それができず困っている状況に対して、何かできることはないかと思いますが、なかなか難しい面があります。

また、ろう者へ向けたコロナウイルスについての情報は本当に少ないです。

最近行政や国から情報が出される時には手話通訳が付き、テレビでも見る機会が以前と比べると増えてきました。でもほとんどの情報には手話がなく、情報量としてはとても少ないです。ですからろう者は余計に大きな不安を感じ、新型コロナウイルスって何？死んじゃうの？などと思ってしまう人もいます。きちんと正しい情報を、ろう者の言語である手話で伝えることが本当に大切だと思いました。

山田

ありがとうございます。おっしゃる通り、コロナの情報がなかなか入らないというのは、本当に不安になりますよね。ちなみに皆川さんはコロナの情報はどこから得ているんですか？

皆川

ほとんどは日本語の文字情報という形でインターネットから得ています。今までにない新しい情報となると英語が多いです。やはり研究が進んでいるので、英語の情報も見たりして、自分なりに情報を得ています。

ろう者同士はビデオチャットで手話で情報交換して、シェアされ情報が伝わっていくことがあります。それが逆に、間違っただけの情報を広めてしまうこともあったりします。確証のある正しい情報を広める必要があります。

ろう者の社会は狭いので、一度発信された情報はあっという間に広がってしまうことがあります。そのあたりをどうしたら良いかと考えました。そこで看護師の立場からコロナウイルスとは何か、何に注意すれば良いかなどについて手話で説明する動画を作り、多くの人に見てもらうことができました。ろう者が少しでも多くの情報を得る助けになればと思っています。

以前新聞かなにかの記事で読んだのですが、手話を使うメリットとして、聴者が声で話すときには、つばが飛ぶので飛沫による感染リスクがあるけど、手話だったら飛沫は無いから大丈夫といったことが書いてありました。

手話は、声で話すのと比べて飛沫が少ないのかどうかははっきりとしたことはわかりませんが、手話というのは例えば、私、思う、不思議など・・・こんな風に顔に触れる表現があるんですね。

ウイルスが付着した手で、手話で話を続けることで、知らないうちに目や鼻や口から目には見えないウイルスが侵入してくる恐れがあります。手話だから大丈夫というわけではありません。

聴者の世界にはこのような情報は絶対がないと思うので、ろう者の生活に合わせた情報提供が必要だと思います。

山田

このコロナ禍において、環境が変わったかと思うんですけど、良かった面みたいなものがありますか？

皆川

ろう者の生活の中で変わったものの例としては、情報保障があると思います。手話通訳や文字通訳は今までだったら、大学の授業の時には、大学に手話通訳が来て対面で

通訳を受けていたし、文字通訳なら隣同士に座ってノートテイクを受けていましたが、それもできなくなってしまいました。

代わる方法としてはオンラインでの提供になる訳ですが、そこに手話通訳をどうつけるのか、文字通訳をどのように表示するのかなどのシステムについては、まだまだいろいろな課題があると思います。

ただ逆に良かったなと思うこともあります。日本には手話通訳がたくさんいますが、それでも需要に対してまだまだ足りない状況ですよね。

通訳を依頼したいと思っても、私はアメリカにいるし、日本から通訳を呼ぶことはできません。

渡航費や時差の問題もあります。

でも今みたいにオンラインで繋ぐことができれば、日本にいる通訳者に自宅にいながら通訳をしてもらうことができます。そのあたりは以前と比べると通訳の手配がしやすくなったと思います。

ここで1本目のインタビュー映像が終わります。

2本目のテーマは、日本とアメリカの文化のちがいや、ろう文化についてです。

ぜひご覧ください。